

災害支援活動報告①

岩手県上閉伊郡大槌町での一週間



外科
吉竹 修一

東北地方太平洋沖地震の被災者の皆さまに、心よりお見舞いを申し上げます。

私は東北大学出身で、学生時代、初期研修を含めて9年間東北地方で過ごしました。3月11日に起きた未曾有の大震災で馴染みのある風景が一変しました。友人、先輩後輩の無事を確認はしたものの、彼らが不眠不休で頑張っているのを考えながら過ごしていました。

そして徐々に東京の報道は被災者の事ではなく原発のこと、そして人々は地震前の日常に戻り始めていました。当然のことです。東京での仕事を中断して現地に赴くことにはためらいはあったのですが、皆さんのご協力とご理解がありまして、今回AMDA (The Association of Medical doctors of Asia) というNGOのグループに参加させていただき、4/8～4/14まで岩手県上閉伊郡大槌町で災害医療支援活動をしてきましたので、その時の事をお話しさせていただきます。

大槌町は町の55%が損壊するという被害であり、その中でも最も不幸なことは、大槌町役場に津波が押し寄せ、町長をはじめ、津波対策にかかわる人たちが全員犠牲になったことでした。



▲反転している家

医療機関も壊滅し、行政も医療も、完全に機能不全に陥ってしまった町。それが大槌町でした。

町の様子は写真で見る戦後の焦土のようでした。あたり一面にがれきが散乱し、あり得ない位置に船があったり、家が転がっていたりしました。ほんとに目の当たりにすると言葉になりませんでした。津波の脅威が凄まじかったことを感じさせていました。また町の臭いも今までに経験したことのないもので、焼け焦げた臭いに、津波が残した土砂が腐敗し始めた臭いが織り交ざり異臭を放っていました。



▲アパートの上に乗った船

自衛隊の方に遊んでもらう子供たち ▶



私が現地で行ってきたことは、巡回診療と、避難所で臨時診療所の外来です。

巡回診療では一軒一軒のお宅を訪問して、診察をしたり、薬の処方をしたり、お話を聞いたりしました。また外来では、傷の処置などを行いました。着の身着のまま避難した方が多いので、お薬手帳を再度作り始めることなども行いました。巡回診療では、話を聞くことが大きな目的になっていたように思います。前向きになろうとして、抑圧しながら生活している方々が多く、話し終わると「聞いてもらって少し楽になった。」と仰っていただけました。

避難所では、250人ほどが非常に規律正しく生活をされていました。東北の方々の忍耐強さを表していたように思います。また感染症への啓発も非常に行き届いており、幸いなことに、ノロウイルスやインフルエンザなどの流行はありませんでした。子供たちはとても元気に遊んで、笑顔が絶えませんでした。時にぼーっとしたり、夜中眠れないなどという話も聞きました。津波のフラッシュバックや、余震による不眠はやはりゆゆしき問題で、様々な県のこころのケアチームが介入していましたが、継続的な支援が必要になってくると思われました。ちょうど災害から1カ月が経とうとしていた時期で、急性期の医療支援から、保険医療に移行しつつあるときでした。地元の開業医の先生方が中心となって医療体制の再整備に尽力なさっている姿に、非常に感銘を受けました。

非常に意味のある1週間でした。地震前の生活に戻るにはまだまだ途方もない時間がかかります。震災が起きてから日本中が、「今自分にできること」を考えてくれていると思います。東北地方はもともと医療過疎であり、今回の震災で、医療壊滅を起こしました。もともと常に人手不足です。これから復興に向けてやらなければならないことが山ほどあります。

余震が続いている現在、日本全体が高い防災意識を払いながら、この未曾有の災害から立ち直れるよう、継続した協力を願って止みません。



AMDAのスタッフと臨時診療所の看護師さん